

知 慧 と 文 学

——T. S. Eliot の Goethe 論をめぐって——

両 角 克 夫

I

T. S. Eliot は 1955年、Hamburg 大学で行った講演 “Goethe as the Sage” に於て興味ある一つの問題を提起している。それは “自己と世界観や理念を異にする作家を理解し鑑賞することは可能であるか？” という問題である。これに対して彼は結論として、詩人の “philosophy” と “wisdom” とを区別し、wisdom は philosophy を超えるものであり、詩人 Goethe はその wisdom によつて “great Europeans” の範疇に入るとする。“great” とは “universal” の意味でもある。更に Eliot は、“…there is something more in the greatest poetry than ‘ideas’ of a kind that we must either accept or reject, expressed in a form which makes the whole a work of art” と云う。では wisdom とは何であろうか？ “……Of revealed religions, and of philosophical systems, we must believe that one is right and the others wrong. But wisdom is λόγος ζῶντος, the same for all men everywhere.” 更に wisdom の機能は、“Wisdom is a native gift of intuition, ripened and given application by experience, for understanding the nature of things, certainly of the human heart” なのである。そして彼自身世界観や信仰を異にする偉大なる作品に接近する場合には、Coleridge が Biographia Literaria, (XIV) で述べている “……willing suspension of disbelief for the moment, which constitutes poetic faith” のみでなく、更に “try to put myself in the position of a believer” を行っているようだと Eliot は言う。

以上で Eliot の Goethe に対する姿勢は一応明白になつたのであるが、では Eliot と Goethe の世界観の相異は何であつて、しかもその信条の相異を超える logos synos としての wisdom は Goethe に於てどのような姿をとっているかを考察してみよう。

II

Goethe の世界は一つの森であつて、そこに入り込んだものは様々なものを見出すのである。そして己の見出したものによつて夫々のゲーテ観を作り上げるのである。様々なものが多様に存在し、しかも調和と統一を形成しているところに Goethe の偉大さ、universality がある。彼はまさに 18世紀から 19世紀にかけてのヨーロッパを代表する詩人であり、更に Goethe 自身 1825年頃から 1827年にかけて Weltliteratur の構想をもつたのである。P. Valéry は、1932年 4 月 30 日 Sorbonne 大学に於ける Goethe 死後百年祭に《Discours en l'honneur de Goethe》と題して講演し、翌 5 月 Frankfurt での “ゲーテ談話会” に欧州各国の思想家学者、芸術家、文学者等 18 名の中に加り、《Homme d'Univers》の主題の下に Goethe を

語っている。Valéry は, *homme d'univers* としての Goethe は, 一個の永遠の現代人であるとかえ云っている。彼はヘレネに呼ばれて救われ PATER AESTHETICUS IN AETER-NVM として現れる者であると Valéry は Sorbonne での講演を結んでいる。

この“普遍人”は Eliot に於ては“sage”としてあらわれる。sage の本質をなすものは wisdom であり, wisdom は哲学や理念の域を超えたものである。知慧とは人間に対する深い理解から出発し, 更に人間の生きるべき方向を示唆するものであり, 古来それは格言や箴言の形で残されて来た。Aesop 以来の寓話も人生の知慧を語らんとするものであり, フランス文学の重要な要素をなすものもこの知慧である (cf. F. Strowski: *La Sagesse Française*)。又, 旧約聖書に於ても, Thorah, 歴史書, 予言書のグループとならんで, ヨブ記, 詩篇, 箴言はじめ *libri deuterocanonici* をも加えたグループは, まさに知慧文学と呼べるべきものである。そして以上の諸文学に現れた知慧は夫々その性格を異にする。Aesop に於ける知慧は極めて世俗的であり, *moralistes français* に於けるそれは心理的であり, 又ヘブライの文学に於けるそれは宗教的であり, ギリシャ末期のストアやそれに続く Seneca などのラテン人のそれは哲学的である。ヨーロッパの文化は, ギリシャ・ローマ的なものとヘブライ的なものの結合の上に成り立っていると考える時, ‘ヨーロッパ人 Goethe’ に 於て見出されるものも, やはりギリシャ・ローマ的ヘブライ的なものを背景とするものと考えてよいであろう。唯そこには, ゲーテの場合, その時代と民族をも多分に考察に入れる必要がある。

1780—1830年はドイツの哲学及び文学の開花期とされるが, これは又“Goethezeit”と呼ばれる時代でもあろう。ドイツ古典派の重要な時期, 1790—1806年は, 古代的, ギリシャ的なものと, 北方ゲルマン的なものの融合の時代でもあつた。このドイツ古典主義の理念は, 人間の神化であり, 人間は人間にとつて永遠の法則であると同時に, 目標でもあり, 自らの中に安らい, 自らに於ける存在の完成, 瞬間及び偶然からの脱却を志向するものであつた。これは思想史的に見ると, J. J. Rousseau の自然主義的ロマン主義, Voltaire その他フランス啓蒙思潮をうけつぎ, それに北方ゲルマン主義が結合して, ギリシャ的古代的な法則, 調和, 永遠, を志向したものである。これは又, 15—16世紀の人文主義と the Renaissance 精神のドイツの展開でもあつた。そこではヘブライ的なものは背後におしやられ人間中心の思想が前面に強く押し出されていた。そこでは, 古代的 polytheism は, Spinoza の rationalism を通じて, 自然主義的 pantheism にその典型を見出した。それはドイツロマン派哲学の完成とも云える Hegel に至るものであり, Schelling に於ても同一哲学として現れて来る。このような時代に生きた Goethe は, 詩人としてその Zeitgeist の完成者であり具現者でもあつた。Goethe 自身, 非キリスト者を自覚し, よい意味での偉大なる異教徒たる地位を占めた。然し, 一面, 16世紀 Luther に発した the Reformation の流れは, ドイツ観念論やその背景の中に存在していたのであり, その18—19世紀の形態としての自由主義神学は, protestantism 内部から, Kiekegaard や Barth の声となつて再び批判の対象となつた。それはともかくとして, 異教徒を名のる Goethe 自身, ドイツプロテスタントの家庭に育ち, その幼年時には宗教的な教育を受けたのであり, 初期の作品にはその影響が見られる。ライプツヒに於ける学生時代には, 無宗教的啓蒙主義が Goethe に決定的な影響を与えたと云われる。然し, それにもかかわらず, Goethe はその時代を超え, 意識的ではなかつたにせよ, 宗教的なものに対する深い理解をもつていたことは彼の作品の中に見られるところである。彼の Ehrfurcht がそれであり, 始めと終りとに於て旧約のヨブ記に通ずる構想を持つ

“Faust” には救霊の主題が見られ、詩 “Das Göttliche” などに於てもそれが感ぜられる。又ギリシャ劇からその素材をとり、これを “たましいの劇” として内面化し、Deus ex Machina としての外面的解決を排した “Iphigenie” は、Goethe 自身晩年 “あらゆる人間的欠陥を純粹な人間性が償う” と云う如く、それは犠牲と償いの観念を内包するものである。

更に “Faust” の主題の側面を一瞥しよう。Goethe が Faust 伝説を象徴として用い、主題としたものは、自然から疎外されたものの悲劇であると云えよう。今まで試みて来たような方法では望みは満たされぬと知り、Faust は自然から足をふみはずし、罪の中に入り込む。魔法の誘惑は Faust を自然——つまり健全な調和や善——から疎外し、悪へと導く。然し未だに善なる自然を完全には喪失していない Faust の靈魂の救いは希望をとどめている。自然から疎外された Faust の悲劇は次の独白に要約される。

Noch hab ich mich ins Freie nicht gekämpft.
 Könnt ich Magie von meinem Pfad entfernen,
 Die Zaubersprüche ganz und gar verlernen,
 Stünd ich, Natur, vor dir ein Mann allein,
 Dar wärs der Mühe wert, ein Mensch zu sein!
 Das war ich sonst, eh ichs im Düstern suchte,
 Mit Frevelwort mich und die Welt verfluchte.
 (Faust II Fünfter Akt, Faust im Palast)

然しながら、Prolog im Himmel に於ける
 Es irrt der Mensch, solange er strebt

.....

Ein guter Mensch in seinem dunklen Drange
 Ist sich des rechten Weges wohl bewußt.

という Der Herr の声は余韻を残しており、尙、最後に近い場面で、Engel は宣言する。
 Wer immer strebend sich bemüht,
 Den können wir erlösen.

そして、最後には、Jungfrau, Mutter, Königin, Göttin が Gnade を取りつぐ者としてあらわれ、Das Ewig-Weibliche, Zieht uns hinan. をもつて終る。この “das Ewig-Weibliche” は聖母 Maria を象るものであろう。然し、Maria は決して Göttin ではないのである。

以上の如くして、死せる Faust の霊は救われるのであるが、これは、自ら努力を続けたから、自らの力で救われたのか、der Herr からの Gnade によるものであるか、問題が残る。旧約の Job は自らの力を全く捨て去り Adonai の力に帰依した時はじめて救われたのであるが、Faust の場合はその点多分に自力の色合を残すと云えよう。Faust を操るものは Satan の象りとしての Mephistopheles であるが、Faust は der Herr を仰ぐことなく自らの力でのみ最後まで歩き続けているようである。ギリシャ劇では、運命として現れるものが、Mephistopheles であり、Faust は自らの中にある暗い Drang としての運命と闘っていく悲劇的な英雄であると解することも出来よう。

Faust は、罪の誘惑に導かれて、初めて大きな秘密を知つたのであり、その罪科は Faust

を滅するものではなくむしろ純化をうながすものである。罪の贖いによつて再生すると云う考えは、W. Meister の徒弟時代や遍歴時代の主題となつている (cf. A. Schweitzer: Goethe 1932)。

このように考えると Goethe の宗教的資質は濃厚なものになる。然しここに見られるキリスト教は、ギリシャ化され、ゲルマン化され、内在的な pantheism に接近して現れていると云えよう。

Goethe の宗教性を示すものとして、詩、“Grenzen der Menschheit” も注目すべきである。そこでは、“der uralte, heiliger Vater” に対して人間はいと小さきものとして登場する。

Ein Kleiner Ring
Begrenzt unser Leben,
Und viele Geschlechter
Reihen sich dauernd
An ihres Daseins
Unendliche Kette.

Goethe の到達した人生の知恵は、次の詩などにうかがえるようだ。それは “Das Göttliche” であり、次の語句で始る。

Edel sei der Mensch,
Hilfreich und gut !

自己に忠実であること、これが edel であり、他人に対して忠実であること、これが, hilfreich であり、善の普遍性を信じ実践することが gut である。

又、W. Meisters Wandeljahre (Drittes Buch, Erstes Kapitel) にある詩行では Liebe が称えられる。

Und dein Streben, sei's Liebe,
Und dein Leben sei die Tat.

Goethe にあつては、Liebe はどこまで Tat でなくてはならぬ。つまり犠牲と献身に結ぶものである。

Goethe の実践的知恵は結局、良心にもとづき、善と愛の実践への努力を続けることにある。良心の存在を認め、善の普遍性を認め、愛の実践を称える態度は、宗教、思想の如何を問わず、真面目に努力する人間にとつて共通なことがらであろう。

聖パウロは、Areopagus の丘に立つて、異教徒、アテネ人達を前にして語る。

As I passed by, and beheld your devotions, I found an altar with this inscription,
TO THE UNKNOWN GOD. Whom therefore ye ignorantly worship, him declare unto
you.

in the Lord we live, and move, and have our being; as certain also of your own
poets have said, For we are also his offspring. (The Acts XVII)

When the Gentiles, which have not the law, do by nature the things contained in

the law, these, having not the law, are a law unto themselves: which shew the work of the law written in their hearts, their conscience also bearing witness, ………

(Romans II)

これは、神学的には、普遍的自然法の存在を示すものであり、implicit faith の意義を告げるものであろう。

このように見て来る時、異教徒を自称する Goethe その人の中に、自然法としての良心の確認と、implicit faith の存在を見ることが出来る。それは Goethe の Weisheit の中心を形成するものであり、その Weisheit の普遍性を説明することにもなる。

さて我々は、T.S.Eliot に戻らなくてはならない。

III

Eliot は Goethe を論ずるに際し自らの立場を明白にする。

For anyone like myself, who combines a Catholic cast of mind, a Calvinistic heritage, and a Puritanical temperament, Goethe does indeed present some obstacles to be surmounted.

ここに表明された Eliot の信仰は、orthodox の神学の上に立つものと云えよう。その人間観としては、Imago Dei として創られた persona であると同時に、Adam と Eve による peccatum originale を負うものである。その救霊は persona としての超越神から Jesus の贖いを通じて得られる Gratia によつてのみ可能となる。この gratia は、創られた自然の中に内在するものではなくて、外からの無償の donum であり自ら努力して得られるものではない。persona としての神の超越性と immanent pantheism とは両立しないものである。

又 Eliot は云う。

I came to understand that my quarrel with Goethe was——apart from some personal traits which now seem to me of diminished importance——primarily a quarrel with his age; for I had, over the years, found myself alienated from the major English poets of the nineteenth century, both of the Romantic Movement and of the Victorian period.

Eliot は、20世紀の詩人であり、20世紀文学は近代の終末としての19世紀の批判から出発したものである。イギリスに於ては、T.E.Hulme による humanism の限界の提示とロマン主義への激しい批判によつて20世紀文学が出発したと云つてもよい。Thomism の復興や、Hegel の鋭い批判から出発した Kierkegaard の流れの中にある危機神学、弁証法神学の出現は、18~19世紀的な、観念論、楽天的進歩主義、自由主義、を徹底的に批判するものであった。America に生れ、ヨーロッパに移つて来た Eliot は当然かかる20世紀の子であり、フランス象徴主義を通じて Baudelaire の中にある反19世紀主義、反ロマン主義的要素即ち原罪のドラマに同感し、更に17世紀のイギリス形而上詩に親近性を見出したのである。更に Dante につながることによつて、ヨーロッパ詩の伝統の意識の中に自らを位置づけようと試みた。その場合 Eliot にとって、中世以来の伝統的な信仰を保っている Catholicism は重要なものとなり、自ら Anglo-Catholic の徒となつた。このような立場からする時、Goethe のよ

うな19世紀初頭を代表する人間は、Eliot だけでなく、20世紀の多く詩人達にとって近ずき難いものであることは納得出来よう。然るに中年を過ぎた Eliot にとって、19世紀の他のロマン派詩人達と異つて、Goethe がその偉大性をあらわして来たのは、まさに19世紀ロマン派を超えたヨーロッパ人としての Goethe の普遍性であり、その普遍性は知慧と呼ばれるものである。その知慧は世俗的なものを多く含みながらも良心と善意と愛にもとづくものであるが故に、神学上の自然法と一致するものであり、humanity の本性につながるものであり、Eliot のいづく Faith とは一致しないけれども相反するものではない。

Gratia supponit naturam.

Gratia perfecit naturam.

Gratia pulchrificat naturam.

の如きスコラの神学的命題は、gratia と natura との関係が決して相反するものでないことを意味している。Goethe は“Natur”にあらゆる価値を内包させ、人間の完成は自然からの疎外を克服して自然に帰ることであり、そこに純化された人間を見ようとする。この点、そこには J. J. Rousseau の自然主義的ロマン主義の影響を見ることも出来よう。暗い衝動は自然の中にあり、魔法の誘惑はそれを利用するものであるが、自然は本来、善であり、努力によつて結局は人間の救いが可能とされるのであろう。なる程、人間の限界の自覚は Goethe の中に存したにせよ、人間の可能性の主張が Goeth に於てより強く打出されていたことは否定出来ない。他言すれば、人間は自らの本性に従うことによつて、完成へと導かれるのであり、他者からの啓示、他者からの gratia を必要としなかつたのであろう。このような自然主義、ロマン主義は、一面 Nietzsche の非合理的な衝動や意志肯定の哲学に導き、ゲルマン的な性格を更に明白にする。他面、Goethe の調和と統一の偉大な象徴としての自然は、現代の如き分析と、分業の時代に、再び調和と統一の象徴としての“Natur”を暗示する。これは、ヨーロッパ文学の伝統の中にある、ヘブライの宗教的知慧、ギリシャ・ローマの哲学的知慧に加えてゲルマン的自然の知慧と呼んでもよいものである。その暗い衝動を含む北方ドイツ的ゲルマンの知慧は、ゲーテに於ては古典的なもの、南ヨーロッパ的なものの光の導入を待つて、みがかれ、完成されたと云つてもよいであらう。

Goethe の普遍性は、abundance, amplitude, unity, を内包するものであり、各人はそのゲルマンの森に入るることによつて、夫々異つた眺めを得るであらうし、それが又 Goethe の偉大さなのである。

IV

20頁そこそこの Eliot の“Goethe as the Sage”は Goethe を知らぬ者にはその研究をうながし Goethe を多少知つている者にとっては静かに反省の機会を与える落ち着いた文字である。Eliot は自己とは思想的にも、体質的にも異質的な Goethe に対して、己の感情を抑制し、尊敬を持ちつつ静かに対している。Goethe に於ける19世紀的なものと、超時代的なものを区別しながら、Goethe をヨーロッパ精神の伝統の中で見ようとしている。その場合、当然引合いに出されるのは、Dante と Shakespeare なのであるが、そこでは三つの巨星の普遍性と云う共通点が示されるのみであり、夫々の比較考察はなされていない。そして Eliot の好みから云うならば、Goethe は、Dante や Shakespeare の次に置かれることは明白であ

る。

Eliot は、Goethe を語るることによつてヨーロッパ文学の本質について語り、批評の方法をも実践的に提示し、又己の批評家としての成長の過程を体験を通じて語っている。更に Coleridge 以来の、哲学と詩の鑑賞の問題を展開し、思想としては Nietzsche につらなる Rilke に関して、詩人としての Rilke とその思想とを一応分けて考えようとする。

Rilke に関する H.E. Holthusen に対する Heller の反論を紹介しながら、Eliot 自身、ある文学作品を鑑賞するためには、そこに出ている哲学や信条に合一する必要はないのであり、詩人の“哲学”と“知慧”との間に明確な区別を設定することによつて、知慧の普遍性を称えているのである。芸術に於ては、人生哲学や思想は素材としての働きを持つものであり、作品はどこまでも美としての価値を問われるのである。文学の文学たる価値基準は、“美”であると簡単に言い切れぬものがあるが、そうかと云つて、文学作品の価値をその思想内容によつて決定することは不可能である。文学作品は思想を包みながらそれを超えるものであり、又偉大な宗教は、あらゆる自然的価値を包み、それを秩序づけるものであり、決して自らの純粋さの主張の故に非文化的な偏狭さに陥るものではない。愛の宗教は、自然を完成し、純化すべき愛の基体でなくてはならぬからである。

Augustinus はその“告白”の第一頁に於て、“私達の靈魂は、貴方の中に安らうまでは不安である”と述べているが Goethe の安心立命は、自己完成の中にあり、それは自然としての自我の中に安らうことによつて得られるものであつた。それは又ドイツ古典主義の理想でもあり、ヨーロッパ精神の伝統の中にある Hebraism 即ち theocentricism に対抗する人間中心主義であつたことは、Eliot の最も抵抗を感じる点であろう。

Goethe に於ける知慧は、どこまでも“自然”に留るものであつたことは明白である。

Journal of the Faculty of
Liberal Arts and Science, Shinshu University
1964 No. 14, p.p.

Summary

“Wisdom and Literature”

—Around “Goethe as the Sage” by T.S. Eliot—

by Katuo MOROZUMI

This article treats of the problem presented by T. S. Eliot of a relation between the philosophy of a poet and his wisdom, through a brief study of Goethe. The universality of Goethe comes not from his philosophy grounded upon “Nature” or the pantheism of Spinoza but from his wisdom grounded upon the understanding of humanity. We can appreciate works of Goethe even if we cannot accept his philosophy which is under the influence of the spirit of 18~19th century, because his wisdom is so great and so broad that it can understand and embrace not only various aspects of the human heart, but of nature herself.

Of course there are many poets whose works we cannot appreciate without accepting their philosophies. We can say such poets are minor or philosophical, ideological writers. Their style may be called potential. It is difficult to explore the problem of poetic belief versus philosophic one, but it is clear that poets do not hold an “idea” in the same way that philosophers hold it. Then what is “poetic belief”? It is impossible to define it, because poetry is beyond any logical definition. It is a kind of joyful experience, a kind of pure and disinterested pleasure. But this pleasure comes from the wisdom or conscience of great poets, after a long acquaintance with whose works we can feel wiser men because of the time that we have spent with them.